

金末元初における「江湖派的」詩人（補遺）

——段克己・段成己と張弘範——

高 橋 幸 吉

一. はじめに

筆者は前稿「金末元初における「江湖派的」詩人——楊宏道と房皐」（内山精也編『南宋江湖の詩人たち 中國近世文學の夜明け』所収。勉誠出版、二〇一五。以下前稿と稱す）において、南宋江湖派と同時期に北方で活躍した非士大夫詩人の存在とその意義について論じた。前稿では副題の通り楊宏道と房皐という二人の人物に焦點を當てて論じたが、これは兩者が科擧に及第しておらず、かつ各地を遊歴しているという經歷から、江湖派との比較に相應しいと考えたからである。本稿では前稿で取り上げられなかった段克己・段成己兄弟と張弘範について考察してみたい。金末元初において非士大夫詩人が作詩活動の中心を擔った點について、詳細は前稿を参照されたい。

二. 段克己と段成己——華北における詩社活動の例

金末元初、主に黄河と汾水の間の地域で活躍した文人に河汾諸老（《河汾諸老詩集》に收録された麻革・張宇・陳賡・陳庚・房皐・段克己・段成己・曹之謙の八名）がいる。このうち房皐は前稿で述べたとおり、各地を遊歴し南宋に渡って詩を賣りながら生活していた可能性が高い。これに對して段克己（字・復之、號・菊莊または遁庵。一一九六～一二五二）と段成己（字・誠之、號・菊軒または遁齋。一一九九～一二八二）は隱棲して詩社を主催した詩人である。

段氏は絳州稷山（現在の山西省運城市）の名族で、宋金元の三朝に涉って隆盛を誇った。その家系については碑文や墓銘が

中國詩文論叢 第三十四集

現存しており、虞集「河東段氏世德碑銘」⁽¹⁾に詳しい。段克己・段成己兄弟は若くして俊才を謳われ、金末文壇の盟主である趙秉文は彼らと面會した際に「二妙」と稱えた。段成己は正大元年（一二二四）に科擧に及第し宜陽縣（現在の河南省宜陽縣）の主簿となっている。段克己も金末に登第しようだが仕官していない。彼の及第時期は弟より遅く、金朝が瓦解に向かっており、實效支配していた地域は河南とその周邊に限られていた。もはや金朝に地方官僚を差配する力がなかったのかも知れない。

段成己は宜陽主簿の後には仕官せず、金朝滅亡前に兄弟は龍門山（現在の山西省河津市）に隱棲する。その後モンゴルの憲宗元年（一二五二）まで十數年をこの地で過ごし、詩社を主催して作詩活動を行った。憲宗元年に段克己が死去すると段成己は平陽府（現在の山西省臨汾市）に遷り、中統元年（一二六〇）には平陽路儒學提舉に推薦されている。いったんは斷つたが翌年再度推擧され、數年この官を務めた後、老齡を理由に辭職している。その後は没するまで閉門して讀書する生活を送った。

『河汾諸老詩集』所收の作品以外に、段克己の孫段輔が彼ら兄弟の作品を集めて『二妙集』を編纂しており、河汾諸老のなかで唯一彼らの詩文集だけが現存している。その作品は大半が龍門山に隱棲していた時期のものであり、彼らの詩社活動が窺える。南宋で顯著に見られる詩社活動であるが、金においてはその活動を確認しがたい。金朝滅亡前では元好問の詩中に「詩

社」という語が現れるが、これはいわゆる文人サークルとして定期的に行われていた活動であるのか、たまたま集まって詩を作ったことを詩社という語で表したのか判斷しがたい。段氏兄弟は詩社という語を華北において自覺的に用いた、希有な例である。

段氏兄弟と詩社の成員とはかなり頻繁に交遊していたようであり、詩題には封仲堅・楊彥衡・周景純・張漢臣・衛襲之・衛行之などの詩社成員の名が何度も現れる。現存作品数は段克己が詩65題172首、詞が48題67首、段成己が詩110題198首、詞43題63首である。そのうちこの六名が詩詞の題に現れる數をまとめると下記のようになる。

	封仲堅	楊彥衡	周景純	張漢臣	衛襲之	衛行之
段克己	8	7	5	5	5	2
段成己	12	4	3	2	4	3
計	20	11	8	7	9	5

この數字を見ても彼らとのやりとりがいかに頻繁であったかが窺える。

その交遊は詩を見ると清貧なものだったようで、例えば段克

己には「余 龍門山に僑居すること十有餘年、封・張二子は日余に従ひて遊び、而して貧なること又た甚し。因りて所懷を寫き、兼ねて二子に簡し、共に一笑を成す（余僑居龍門山十有餘年、封張二子曰從余遊、而貧又甚焉。因寫所懷、兼簡二子、共成一笑）『全遼金詩』第二八參二頁⁽³⁾」という題の詩がある。作品の上では彼らはみな貧しいように見えるが、その實彼らの社會階層は異なっていたようである。前述の通り段氏は稷山の名族で、彼らの子孫はみな官途に就いており、中でも段克己の孫段輔は吏部侍郎にまで昇っている。一族に高い水準の教育を授けていることから、段氏一族は稷山に相當な家産を有していたと考えられる。しかも彼らが隱棲した龍門山は稷山から二十キロメートルほどしか離れておらず、恐らく彼ら兄弟は段氏の家産によって生活を維持していたのであろう。封仲堅も別莊を持っており、經濟的に困窮していたようには見えない。本當に貧しかったのは張漢臣だけで、彼が亡くなったときに葬儀が行えないほどであった。⁽⁵⁾だが經濟的背景に關わらず、彼らは詩文を通して親しく交流していた。

彼らの詩社は江南の詩社のように廣く近隣地域から人を募るものではなく、龍門山に住む在地の文人たちが山中でひっそりと活動していたものであろう。その題材は日常の交流、山中の遊覽、宴席などである。一例を挙げよう。

金末元初における「江湖派的」詩人（補遺）（高橋）

段成己「詩社の諸君に贈答す（贈答詩社諸君）」（第二八七〇頁）

賣藥韓康伯 藥を賣る 韓康伯

能詩張志和 詩を能くす 張志和

眞鋼須百煉 眞鋼は百たび煉ることを要め^{もと}

明鏡要重磨 明鏡は重ねて磨くことを要す

眼底如君少 眼底 君の如きは少く

閑中得子多 閑中 子を得ること多し

兵連猶未解 兵は連なりて猶ほ未だ解けず

莫厭數相過 數たび相ひ過ぐるを厭ふ莫かれ

◆韓康伯 後漢の隱者韓康のこと。長安で三十數年間藥を賣っていたが、決して異なる價格で賣ることが無いために有名になつてしまひ、霸陵山中へ遁世した。『後漢書』卷一一三、逸

民列傳第七三「韓康」に見える故事。◆張志和 中唐の詩人。

「漁父歌」五首を詠んだ。その事跡は『唐詩紀事』、『唐才子傳』

に見え、段克己には「讀張志和傳」という詩がある。

漢の韓康と唐の張志和の故事を用いて詩社の成員に詩の研鑽を勧める内容である。恐らく彼らの交友範圍は廣くはなく、詩社の成員も數名程度であつたのだらう。末句の「數たび相ひ過ぐるを厭ふ莫かれ」という表現は決して型どおりの挨拶ではない。戦火が完全には収まらぬ状況下で、龍門山の中で狭いコミュ

中國詩文論叢 第三十四集

ニティーを形成し、その中で度々顔を合わせていたのである。段氏兄弟は龍門山中とともに生活し、日常的な體驗も常に共有していた。例えば山中で鷺鷥藤（スイカズラ）を見つけ、段克己がこれを詩に詠うと、段成己がすぐに次韻して唱和している。友人の送別やその死を悼む詩など、二人でしばしば同一の詩題ないしは内容の作品を残している。

この他に、兄弟で同題の一連の詩を作っており、これは恐らく詩會を行った際の課題だったのではないだろうか。現存作品の中では「梅花十詠」、「花木八詠」があり、花や木をテーマに連作詩を作っていることは江湖派と同様の傾向である。金代の詩人は花木に關心が無いわけではないが、花木を題としてその姿を専ら描寫した作は少なく、多くは詩中に些かの情景を添えるに過ぎない。例えば梅については『中州集』では劉仲尹「墨梅十一首」があるのみで、しかもこれは純粹な詠花詩ではなく、題畫詩の要素も併せ持つ。南宋の詩人は詠梅詩を作ることととりわけ好んだが、金の詩人では非常に少ない。それ故に彼らの詠花詩、特に「梅花十詠」は北方人が作った詠梅詩の連作として稀少な例である。

段克己「梅花十吟」（『四庫全書』本では「梅花十詠」に作る）は各々の小題が「憶」「夢」「尋」「探」「乞」「折」「嗅」「浸」「浴」「惜」となっており、段成己「梅花十詠」の小題も「折」が傳わっていないが同様である。それぞれ一首ずつ見てみよう。

段成己「憶」（第二八四四頁）

姑射仙人冰雪膚	姑射の仙人	冰雪の膚
昔年伴我向西湖	昔年	我を伴ひて西湖へ向ふ
別來幾度春風換	別來	幾く度 春風換はり
標格而今似舊無	標格	而今 舊に似るや無しや

（◆姑射 姑射山。山西省臨汾縣の西に位置する山の名。◆別來 別れて以來。◆標格 風格、風貌。）

段成己「浸」（第二八九七頁）

洛浦飄飄信有神	洛浦	飄飄として信に神有り
凌波忽覩一枝春	凌波	忽として一枝の春を覩る
摩挲老眼看微步	老眼	を摩挲して微かに歩むを看
旖旎香生羅幃塵	旖旎	として香生ず 羅幃の塵

（◆洛浦 洛水のほとり。本詩は「洛神賦」を踏まえている。◆摩挲 撫でさする、こする。◆旖旎 柔らかで美しいさま。◆羅幃 絲羅（織り目の文様のある薄絹）の靴下。）

詩人が梅の花を想像し、夢に見、そして探しに行き、最後は梅が散るのを惜しむという一連の流れを描寫している。南宋の江湖詩人張至龍も類似の手法で五言絶句の連作「梅花十詠」を残しており、各々に小題を附している。ただ張詩は「梅梢」「落雷」「欲開」「半開」「全開」「欲謝」「半謝」「全謝」「小實」

「大實」と、梅の具體的形狀を題にしており、まだ蕾もない梅の梢から開花、結實までの過程を描いている。⁽¹⁾これに比べるゝと段兄弟の詩題は梅よりも詩人自身の感情や動作に主眼があり、詩中でも梅のイメージを婉曲に描寫することに努めて、その形狀を描寫することを極力避けている。江湖派と同様に詠梅詩の連作を残し、さらには兩者が全て同一の小題を用いていること⁽²⁾から詩會での席題であった可能性も高く、非常に興味深い。彼らの詩社は成員が一人また一人と没し、最後は憲宗元年（一二五一）に段克己の死去を以て自然消滅した。その後段成己は平陽府に居を移す。平陽府は宋金、金元の二度の王朝交替においてさほど被害を受けず、そのため金元を通じて北方で書籍印刷の盛んな地域であった。金朝が滅びて間もない太宗八年（一二三六）、モンゴル政權は平陽府に經籍所を設立し、儒者を集めて經史の書を編纂させた。このため蒙元初期に平陽府は東平、大名と並び北方の文人や儒者が集まる地域となった。段成己が平陽に移ったとき、河汾諸老の一人である曹之謙が既に經籍所の官に任じられていた。彼らは交遊があったが互いに詩歌を唱和應酬した作は現存していない。段成己は平陽路儒學提舉の官を辭した後は「閉門讀書」の生活を送ったという。⁽³⁾恐らくその晩年の創作活動はさほど活発ではなかったたのであろう。

金末元初における「江湖派的」詩人（補遺）（高橋）

三 張弘範

張弘範（字、仲疇。一二三八—一二八〇）は崖山で南宋を滅ぼした武將として名高い。大名（現在の河北省大名縣）を中心に勢力を誇った漢人四大世家の一人張柔の第九子で、至元六年（一二六九）からは對南宋戰に派兵されて最前線であった襄陽を包圍した。三年後にこれを陥落させて元軍が南進する足がかりを作ると、以降も總大將バヤンの元で軍功を重ね、至元十六年（一二七九）には崖山で張世傑、陸秀夫ら南宋の幼主を擁する最後の一軍を壊滅させた。對南宋戰の終焉とともに北へ戻るが、翌年死去。後に淮陽王を追贈された。詩詞集『淮陽集』が現存する。父の跡を繼いだ第八子張弘略よりも武名が高く、兄が『元史』『張柔傳』に付隨して傳が記載されているのに對し、張弘範は同卷一五六に獨立して傳が立てられている

張柔は金朝系知識人を進んで庇護した人物であり、元初の名儒郝經も彼を頼って一時期身を寄せていた。そのとき張一族の子弟の家庭教師を務めており、張弘範も幼少時に教えを受けている。だがその詩風は舊金朝系の人々とかなり異なり、『四庫全書總目提要』では『淮陽集』を次の様に評している。

其の詩は皆な五七言の近體なり。南宋末派に沿ふと雖も、然して大抵爽朗にして誦す可きなり。如へば「酒に中り

中國詩文論叢 第三十四集

て未だ醒めざること病に似たるに過ぎ、詩を搜して得ること愁ひの如きに勝る」は、之を『江湖集』中に置くも辨ぜざるなり。（其詩皆五七言近體。雖沿南宋末派、然大抵爽朗可誦。如「中酒未醒過似病、搜詩不得勝如愁」、置之『江湖集』中不辨也。）

『淮陽集』所收の作品を見ると古詩は一首もなく、また典故の使用も非常に少ない。植物を詩題としたものが多く、「餅中桃竹」「風柳」「青杏」「碧桃花」「未開牡丹」「紅梨花」「紅葉」「榴花」「海棠」「白蓮」など多岐に渡る。詠梅詩も「問梅」「憶梅」の二首が傳わる。これらの詩を幾つか見てみよう。

「青杏」(『全元詩』第九冊第一九〇頁)⁽¹⁰⁾

落盡殘紅綠滿枝 殘紅落盡して綠枝に満ち
青青如豆釀酸時 青青豆の如く酸を釀すの時
佳人摘得新嘗怯 佳人摘み得て新たに嘗め怯む
一點春愁鎖畫眉 一點の春愁畫眉を鎖す
(◆鎖眉 眉をしめる。)

「梅雨」(第一九一頁)

輕雲薄薄暗江干 輕雲薄薄江干を暗くし
幾陣紗窓送嫩寒 幾陣の紗窓嫩寒を送る

濃醉呼重新摘得

濃く酔ひて童を呼び新たに摘み得しむれば

未黃梅子已微酸

未だ黄ならざる梅子は已に微かに酸なり

(◆江干 川邊、河岸。◆嫩寒 軽い寒さ、うそ寒、そぞろ寒。)

いずれも非常に平易でかつ繊細優美といえる詩だろう。張弘範の詩は多くが小さな景を詠うものであり、やや女性的で細かな事物に着眼した作が多い。例えば現存作品中では燕の用例が最も多く、詩に14例、詞に2例(地名「燕山」を除く)あり、詩のうち3例は詩題(「雛燕」「新燕」「燕語」)である。次いで窓が10例で、そのうち4例は「梅雨」詩にも使われている「紗窓」である。その他、蟬や壊れた鞦韆(ぶらんこ)などといったものを好んで詩に詠っている。

だが張弘範の詩には全く別の、正しく對南宋戦の最前線で戦った武將らしい作品も存在する。最も代表的なものは長江を渡る際の詩であろう。

「過江」(第一九六頁)

磨劍劍石石痕裂 劍を磨き劍石石痕裂け
飲馬長江江水竭 馬を長江に飲ましめ江水竭く
我軍百萬戰袍紅 我が軍百萬戰袍紅なり

盡は江南兒女血 盡く是れ江南兒女の血なり

◆劍石 劍の形をした石や巖。ここでは試し切りをした試劍石を省略して言った表現か。

崖山で南宋最後の一團を全滅させ、崖にその功を大書して刻ませた武將に相應しい、血氣に溢れた詩である。他にも襄陽包圍中に返信が滞り氣味であることを詫びたり（「襄陽答王仲思」詩）、「已に戎衣を着て十載過ぐ、江南未だ了らず鬢先ず皤なり（已著戎衣十載過、江南未了鬢先皤）」（「述懷」）と述べて戦争の前途を思ったり、この戦争の結末が近いことを確信したり（「南征」二首⁽¹¹⁾）と、歴史的場面に立ち會った當事者らしい心情が述べられている。

この二面性はどのような原因によるものだろうか。張弘範は崖山で南宋を滅ぼしたとき、禮部侍郎鄧剡（字、光薦）を捕虜にしている。彼は元に降らなかったが張弘範は禮を以て遇し、息子張珪の師とした。さらに張弘範の別集『淮陽集』の序は鄧光薦によるものである。現存する張珪の詩も江湖派の作風に近いことから、楊謙氏は「鄧光薦の指導を経ているか、さらには或いは鄧光薦の潤色を経ている」⁽¹²⁾ことをその二面性の原因と推測している。だが張弘範は崖山で鄧剡を捕虜にしてから約一年ほどで死去しており、彼に詩を學ぶ時間はほとんど無かった。となると『淮陽集』編纂時に鄧剡が修正したのであろうか。

金末元初における「江湖派的」詩人（補遺）（高橋）

『全宋詩』を見ると鄧剡の詩は南宋末の戦亂を詠った作もあり、江湖派の詩風に近いとは斷言できない⁽¹³⁾。だが許有壬や蘇天爵の記述では劉辰翁と竝んで言及され、後代の資料ではあるが、彼の詞は劉辰翁らと竝んで高く評價されていたという記述がある⁽¹⁵⁾。江湖派の一人として数えられる劉辰翁と詞が併稱されていることから、鄧剡の詞も同様の傾向があり、彼もまた江湖派に屬すると見て差し支えないだろう。大多數の現存しない作品は江湖派詩人に屬する類の作風だった可能性は高い。

鄧剡の序には「武烈公の作る所、未だ嘗て稿を屬さず、篇什は手に隨ひて散落す。後に親友の遺失を網羅するも、其の僅かに有る者を得て詩詞若干と爲し、將に後屬に傳へんとす（武烈公所作、未嘗屬稿、篇什隨手散落。後親友網羅遺失、得其僅有者爲詩詞若干、將傳於後屬）」とあり、張弘範は自らの詩文をまとめたり保存したりしておらず、没後に遺稿を集めて本書を作成している。恐らくは鄧剡が收録作品を選別するほどの數量は、編纂時に存在しなかったものと考えられる。次に楊謙氏の説であるが、假如に鄧剡が手を加えたとしても、それは詩中の數語であらうし、それだけで江湖派的な小品になり得るだろうか。やはり元々同様の作風を持っていなければ、數文字の修正では江湖派的な作風とはなり得ないだろう。鄧剡が大幅な潤色をし、かつ對南宋戦争を主題とした詩には手を加えなかった、という可能性は少々考えがたい。

張弘範は約十年ほどを南方で過ごしているので、この間に江湖派詩人との接點や『江湖集』を読む機會が有った可能性もある。だが彼の事跡についてはその軍事行動と功績が述べられるばかりで、文學的なエピソードは非常に少ない。さらには北方詩人の交遊圏にも屬しておらず、同時代の詩人と唱和している例が無い。彼は基本的に軍中にあり、前線で指揮を執っていた。そして南宋の人々にとって彼は侵略者であり、好意的に詩文をやりとりする可能性は極めて低い。その中で南方の詩人たちと交遊する機會がどれだけ有ったであろうか。現存する資料からは南方詩壇の影響を受けていることを裏付けるものがないのである。また北方に居た時期に作成したと思われる作品が、既に江湖派的特徴を備えている。⁽¹⁶⁾やはり張弘範自身の作風と着眼點が、江湖派に非常に近い要素を元々持っていたと考えるのが自然であろう。

四. おわりに

最後に段克己・段成己と張弘範について、南宋江湖派との類似點および相違點を考察し、併せて金末元初の非士大夫層の状況を整理して本稿の締めくくりとしたい。

段克己・段成己は詩社を主宰した點や詠梅詩や花木を詠った詩を残している點などが江湖派と同様の傾向として挙げられるが、龍門山を據點としてこの地のみで作詩活動を行っている點

では、所謂四方を遊歴して詩によって生活するという、江湖派のイメージから少々遠ざかる。また兄弟ともに科擧に及第しており、段成己は後に儒官として講學していることや、古詩を一定數作っていることから、經歷作品ともに金朝の傳統的知識人に屬すると言えよう。金朝が瓦解していなければ彼らより一代上の文人たちの様に、縣令を経て翰林院に奉職するという典型的な官歴を歩んでいた可能性が高い人物である。もし南宋に類似の人々を求めるのであれば、永嘉の四靈が彼らに近い存在であろう。しかし在地の知識人としても永嘉の四靈のように廣範な影響力を持ち得ず、またその詩社に屬する人々も、廣く周邊地域から参加を募るような性質のものでもなかった。

張弘範はその詩風において最も江湖派に近い作品を残している。それは彼が詩文を専門とした人物でないことが一因であろうと考えられる。彼は幼少時に郝經ら當代一流の學者や文人から詩文の教えを受けていた。例えばその兄で張家の軍閥を繼いだ張弘略が、北方詩壇の盟主であった元好問から直接詩文の手ほどきを受けるほど、張柔は子息たちへの教育に意を用いた。⁽¹⁷⁾だが彼らはあくまで軍人であり、一地域を管轄する軍閥の運営者であり、政治家であった。詩文の素養があってもあくまで教養の一部であり、研鑽に努める對象ではないのである。故に古詩という形式で儒家的な文學觀を述べることもなく、また自らの作品を残して詩文集を編む意圖も無かった。そのため消閑や

贈答の一端として詩を作り、自然と小品が多くなり、また彼自身の着眼点の細やかさもあって、「之を『江湖集』中に置くも辨ぜざるなり」というような作風の詩が形成されたのではないだろうか。一方で戦火の最中に身を置くという境遇から、戦争は作詩において身近な題材となり得た。このことが彼の詩の二面性に大きな影響を與えていると考えられる。「過江」におけるあまりに過激な表現は彼の本分とは言い難く、むしろバヤンとの唱和の中で生まれた詩句である可能性が高い。⁽¹⁸⁾

前稿との繰り返しになるが、金代において江湖派的な詩人がほとんど現れなかったのは、その国力の發展に對して文學的隆盛が一拍遅れたことが最大の原因であると考えられる。世宗期から章宗の前半、金朝の最盛期においては未だ詩人の數が多くはなく、多くの詩人が現れた金末においては、國土の大部分を喪失していてもそもそも遊歴する場所が無かった。さらにはモンゴル統治下において、戦亂に巻き込まれ捕虜として奴婢とされる可能性が少なくなかった。⁽¹⁹⁾ わざわざ各地を移動するならば、その安全を保障する後ろ盾が無い限り、相當な危険を伴った。元好問は金朝滅亡後、王朝の資料を保存するために各地を巡ったが、それは各地の千戸公、萬戸公の庇護を得ながらである。故に兵亂が収まらぬ華北で龍門山から出なかつた段兄弟の行動は極めて妥當であり、むしろ北歸後も各地を轉々とした楊宏道こそ、危険を冒してまで露命を繋ぐ必要がある危機的な状況に

置かれていたと考えられる。

もう一つの理由は、やはり出版業の成熟度であろう。『中州集』小傳や『歸潛志』を見ると、金代の士大夫には少なからぬ著書があったようであるが、貞祐南渡以前のものが現存するのはほとんど無い。詩文集では王寂『拙軒集』の殘本が傳わるのみである。無論元好問が言う様に戦火によって喪失した書籍が多かつたのであろうが、南宋のような商業出版が成立しておらず、そもそも世に存在する絶対數が少なかつたと考えられる。『中州集』小傳にしばしば見られる「有集傳于世」という表記も、果たしてどれほど世間に流布していたか疑問である。例えば貞祐南渡の後に戸部尚書を務めた蕭貢には文集十卷の他に『注史記』百卷、『蕭氏公論』二十卷、『五聲姓譜』五卷があったとされるが、現存していない。高級官僚ですらこのような状況であり、まして非士大夫層ともなれば自らの詩文を上梓することは非常に難しかったであろう。子孫や門人が著作を上梓し保存することがなければ、後世に伝えることはほぼ不可能であった。楊宏道『小亨集』の殘本が現存するのはかなり貴重な例である。元好問『陶然集詩序』などが記すように、金末には南宋と同様に非士大夫層の詩人が少なからず存在した。だがその資料的制限から、彼らの實體はあまり明瞭な像を描き出さないものである。

【注】

(1) 『二妙集』卷頭所收、文淵閣『四庫全書』本。『國朝文類』卷五五では「稷山段氏阡表」となっている。稷山段氏については飯山知保『金元時代の華北社会と科擧制度——もう一つの「士人層」——』第十三章「稷山段氏の金元時代」に詳しい。早稲田大學出版部、二〇一一年。

(2) 元好問「崔雷ら詩社の諸人に示す(示崔雷詩社諸人)」。本詩は嵩山隱棲中の作であり、崔雷は詩社の名ではなく、ともに当地に隱棲して詩を應酬していた崔淵と雷淵を指す。

『元好問編年詩校注』第一一九頁、中華書局、二〇一一年。

(3) 山西古籍出版社、二〇〇一年版。以下、段氏兄弟の詩は本書に拠り、頁數のみを示す。

(4) 段成己「辛丑清明後三日、詩社の諸君封仲堅の別墅に燕集し、談笑すること竟日。賓主樂しむこと甚し、然るに未だ吾が兄弟の數語を得ざるを以て不足と爲し、既にして遯庵兄詩有るも、余獨り未だしなり。主人負を責めて已まず、因りて命に應ゆるを以て賦して云ふ(辛丑清明後三日、詩社諸君燕集於封仲堅別墅、談笑竟日、賓主樂甚、然以未得吾兄弟數語爲不足、既而遯庵兄有詩、余獨未也。主人責負不已、因賦以應命云)」、第二八七五頁。

(5) 段克己「歲己酉春正月十有一日、吾が友張君漢臣下世し、家貧にして葬ること能はず、郷鄰喪事を辦めて諸君皆な吊章有り、且つ余を邀へて同に賦さんとす。一たび付思す毎に、輒ち神情錯亂し、筆を秉りて復た罷め、今忽ち四句な

り。絶へて言はざらんと欲すも、以て其の哀を表すること無く、因りて古意四篇を作し、比興の足らざると雖も、觀る者予の志の所在を知るに足れば、則ち進みて吾が漢臣を知るも也た疑ひ無し(歲己酉春正月十有一日、吾友張君漢臣下世、家貧不能葬、郷鄰辦喪事諸君皆有吊章、且邀余同賦。每一付思、輒神情錯亂、秉筆復罷、今忽四句矣。欲絶不言、無以表其哀、因作古意四篇、雖比興之不足、觀者足知予志之所在、則進知吾漢臣也無疑)」、第二八八頁。

(6) 段克己「封仲堅とともに鷺鷥藤を采り、因りて詠を成し、録して家弟誠之に寄せ兼て李衛の二生に簡す(同封仲堅采鷺鷥藤、因而成詠、録寄家弟誠之兼簡李衛二生)」、第二八二〇頁。段成己「吾が兄仲堅とともに鷺鷥藤を午芹の東溪に采り、因りて詩を詠みて示さるるも、前代の詩人未だ嘗て此れを賦する者を聞かず。此の花田野籬落の間に長じ、人々之を視るも草芥と異なる無し、是の詩一たび出、好事者の將に貴しとする所を知らんとすなり。感嘆之餘、敬して其の韻を次ぎ、我と志を同うして繼ぎて之を述ぶること有らば、亦た懿からざらんか(吾兄同仲堅采鷺鷥藤於午芹之東溪、因詠詩見示、前代詩人未嘗聞賦此者。此花長於田野籬落間、人視之與草芥無異、是詩一出、好事者將知所貴矣。感嘆之餘、敬次其韻、有與我同志繼而述之、不亦懿乎)」、第二八五七頁。

(7) 『江湖小集』卷十八、張至龍『雪林刪餘』、『四庫全書』本。江湖詩人と詠梅詩については加納留美子「江湖詩人と詠梅

詩——花の愛好と出版文化」(『南宋江湖の詩人たち 中國近世文學の夜明け』所収)を参照。

- (8) 同様に「花木八詠」も小題が「海棠風」、「楊柳烟」、「荷葉露」、「葵花日」、「菊花霜」、「芭蕉雨」、「梅花月」、「山茶雪」と兩者同一のものとなっている。

- (9) 『「妙集」卷八、段輔「二妙集跋」。

- (10) 以下、『淮陽集』は文淵閣本『四庫全書』に拠り、詩は『全元詩』(中華書局、二〇一三年)を併せて参考にした。以下、『全元詩』第九冊の所載頁数のみを示す。

- (11) 二首の尾聯は「明年事はりて朝天へ去り、銅柱東邊第一功(明年事を朝天去、銅柱東邊第一功)」(「南征」二首其の一)、「語を寄す古人 知るるや否や、鯨を戮し海に沈むるは來年に在るを(寄語古人知道否、戮鯨沈海在來年)」(同其の二)と結んでおり、いずれも翌年の戦争終結を予見する内容となっている。第一八六頁。

- (12) 楊謙『元詩史』第二六六頁、人民文學出版社、二〇〇三年。原文「可以認爲、張弘範『淮陽集』中の詩、經過了鄧光薦の指點、甚至或是經過鄧光薦の潤色」。

- (13) 江湖派の詩風について熊海英氏は、晩唐詩に倣う、近體詩が中心で七絶と五律が多い、景物を白描し典故の使用が少ない、という三點を指摘している。熊海英『「晩唐體」——「誠齋體」與「江湖體」——以詩歌的通俗化爲中心』、『新宋學』第四輯、上海人民出版社、二〇一五年。

- (14) 許有壬「吟竹先生墓表」(『至正集』卷五七、『四庫全書』金末元初における「江湖派的」詩人(補遺)(高橋)

本)、蘇天爵「元故少中大夫江西湖東道肅政廉訪使趙忠敏公神道碑銘」(『滋溪文稿』第一四六頁、中華書局、一九九七年)。

- (15) 清・沈雄『古今詞話』卷上に『松筠錄』曰く、宋季の高節、蓋し廬陵・吉水・塗川を推さむ。亦た同じく一派にして、如へば鄧剡、字光薦、劉會孟、號須溪、蔣捷、號竹山、俱に詞を以て一時に鳴る者なり。『松筠錄』曰、宋季高節、蓋推廬陵・吉水・塗川。亦同一派、如鄧剡、字光薦・劉會孟、號須溪・蔣捷、號竹山、俱以詞鳴一時者。」とある。

- (16) 例えば「保定の抱陽山寺に題す(題保定抱陽山寺)」では「兀坐して機を忘れ 禪榻靜かなり、高吟して意を縦はしりまにし竹窓涼し。(兀坐忘機禪榻靜、高吟縱意竹窓涼。)」という詩句がある。小さな景物を描寫する點や、窓というモチーフが登場するのは他の作品と同様である。張弘範は至元六年に襄陽方面に出兵して以降南宋滅亡まですと南方を轉戦しており、北歸してまもなく亡くなっている、本詩で保定を訪れているのは恐らく対南宋戦に参加する前であろう。保定は当時張家の管轄下にあった。

- (17) 元好問「与張仲傑郎中論文」、『元好問編年詩校注』第一三四六頁。

- (18) バヤン「奉使収江南」に「劍は青山を指して山は裂けんと欲し、馬は長江を飲みて江は竭きんと欲す。精兵百萬江南に下り、干戈は生靈の血に染まらず(劍指青山山欲裂、馬飲長江江欲竭。精兵百萬下江南、干戈不染生靈血)」とあり、

中國詩文論叢 第三十四集

楊鎌氏はバヤンと唱和した作であることを指摘している。

『元詩史』第二六五頁。

- (19) 対金戦争中、モンゴルは從來通り相手側の人間を捕らえて労働力とすることを行っていた。劉祁『歸潛志』では戦乱で兵に捕らわれた記述が多数見られる。彼らは後に親類縁者の手によって奴婢から復籍する者も存在した。段成己にも「馮生成之の燕より平陽に歸り、寂照先生に頼りて奴役を脱するを獲、復た士の列に齒^はなる。將に復た燕主に歸らむとするに、吾が友濟夫の來謁し、詩に姑^{しやう}く其の概^{おおよね}を序べて以て答へて云ふ（馮生成之自燕歸平陽、賴寂照先生獲脱奴役、復齒士列。將復歸燕主、吾友濟夫來謁、詩姑序其概以答云）」（第二八六五頁）という詩がある。

- (20) 元好問「中州集序」に「兵火に散亡し、存する所の者を計うるに才かに什に一のみ（兵火散亡、計所存者才什一耳）」とある。『元好問全集』（増訂本）第七八七頁、山西古籍出版社、二〇〇四年。

- (21) 『歸潛志』卷四、及び『中州集』卷五「蕭尚書貢」小傳。

※本稿第二章は中國宋代文學學會第九年屆年會暨宋代文學國際學術研討會發表原稿を改稿したものである。